



黒川
能

王
祇
祭

2008

／月扇堂／



〈黒川能〉というものがあることは漠然と知っていたけれども、お能に興味を持つ前はもちろん、能楽堂通いを始めてからも、およそ自分には関わりのない世界だと思っていた。

イメージ的には山奥の隠れ里に伝わる秘事で、とても生半可な興味で覗けるものではないし、そんなディープなところまで入り込んだら日常には戻れなくなってしまうのではないかと、魔女のサバトか何かのようなものを思い描いていたふしもある。

ちょっと勘違いっぽいぞと気づいたのは、木白山さんやクリコさんという（たぶん）うら若い女性ブロガーたちが単身で出かけた記録を読ませてもらったからだ。黒川は山奥どころかひらけた庄内〈平野〉だし、最近では外来者のために保存会が親切に援助もしてくれるらしい。

それでもまだ敷居が高いと感じていたところ、一緒に行きたいと言ってくれる方があって、ふたりならなんとかと、勇気を出して申し込んでみた。

王祇祭はあくまで神事であるし、一日目は民家での興業だから、やたら大勢のひとに押しかけられても立ちゆかない。部外者の参加は抽選とされ、かなり倍率も高いと聞いていた。試しにと申し込んでみたものの今年はないだろうと半ば思っていた。

それが年も押し詰まった頃、当選通知を受け取って、さあ大変。冷静に検討してみると関西から山形までは気の遠くなるほど遠い。往復込みで四日は潰れる。仕事のほうはただでさえ限界状況。

でも、まあ、行ってしまった。あとは野となれ山となれ（ごめんなさい>ご迷惑をおかけした方々）。

寒さと冷えに弱いので、いきなり雪の王祇祭は冒険だったけれども、結果的には、雪国の美しさに圧倒されて帰ってきた。今思い出しても、あの雪景色に優るのが日本にあるだろうと思う。

京都にはそれこそ日本の誇る建築物や名園がたくさんある。でも、あの雄大な自然の、あまりに寡黙な、そして清冽な景色の前には、所詮人間の造った騒々しい都ではないかという気もする。京都と山形では住んでいる神様の性格もずいぶん違っていきそう。

黒川能以前と以後とでは〈山形〉という響きがまったく違って聞こえる。
山形、素晴らしいです(v_v)

●日程メモ

1/31：新幹線を乗り継いで鶴岡へ。ホテル泊。

2/1：13時過ぎのバスで王祇会館へ。受付。

夕方引率されて当屋へ。

18時から翌朝5時すぎまで観能。

2/2：早朝より祭事。観能。

18時過ぎ、タクシーで鶴岡へ。

温泉に浸かってから夜行寝台「日本海2号」乗車。爆睡。

2/3：早朝京都着。

*最も便利な交通手段は飛行機だと思う。ただ雪で飛ばなかったらどうしようとドキドキするのを避けるため今回は列車にした。

*「日本海号」は、ベッドに横たわったまま京都まで移動できる〈魔法の絨毯〉のような列車で、次回があったら往復ともこれにしたいと思ったけれども、どうやらこの3月からダイヤが変わって京都↔鶴岡間では利用しにくくなってしまう。残念。



2008.2.1 王祇祭（上座当屋）

今年、上座の演目は、

大地踏/式三番/のあと、お能と狂言を交互に

絵馬/鞍猿/頼政/附子/羽衣/しびり/羅生門/節分/金札



黒川能・王祇祭（山形・上座当屋渡部権左衛門宅）

「大地踏」



大地踏、はっきり言って何なのかよくわからない。誰かが「冬の固い大地を起こすのではないかしら」と言っていた。そうかもしれない。汚れない子供の足踏みでなら目を覚まされても大地は怒らないのかも。そしてまた悪霊が出てこないように踏み固めることでもあるらしい。

後見に抱かれて登場した稚児は、神様の憑代「王祇さま＝扇」の前に下ろされて、小さな足でとんとんと大地を踏む。上座の稚児は、劔持遥人君四歳と十一ヶ月だった。

「東に月山高くさん～♪」とか、「北に鳥海まんまんとて～♪」というフレーズがいつまでも耳に残っている。あどけないのに凜として通る声だった。巫女さんの振る鈴の音みたいに、あの声が邪気を祓ってくれるのかも。

「式三番」（千歳・翁・三番叟）



千歳が面箱を持って現れる。翁は扇を差し出し、その上に裏返した面をのせてもらう。面を顔に持ってくるのではなく、扇の上の面に向かって顔を伏せていく。紐は後見が結んでくれる。翁自身は面にも紐にも手を触れないようだ。外すときも一緒。

王祇祭の翁は白装束。上座は「所仏則翁（ところぶっそくのおきな）」という独特のもので詞章は仏教色が強いそうだが、聞き取るのは無理なので違いはわからず。父尉の面をつけると解説にはあったけれども、見た限りではぼんぼん眉毛の翁面のようなだった。

ここまで非常に若いというか幼いひとが多かったところへ、ようやく大人の役者三番叟が現れて重量感が出る。きびきびと舞っていたのに、着崩れのアクシデントで演技を止められてから調子が狂ってしまったのは気の毒だった。

「絵馬」



黒川の「絵馬」には間狂言で鬼が出てくる。この鬼たちは、狂言面ではなくてお能の石橋のようなお顔。めでたく舞ってクサメ留めで退いた。蓬莱の島に住んだり伊勢詣りをしたり、めでたい〈鬼〉って何なんだろう。言語矛盾のような気もするけれど。西洋の悪魔とはかなり違って親しみがあるのですね。

天照大神。神々しいというよりも優しいお姉さんのような印象なのは、面の掛け方の違いだろうか。五流で見慣れているのは鬘→鬘帯→面だけれど、黒川は面→鬘→鬘帯。こちらが古い形なのだそう。たしかにこちらのほうがリアルで人間っぽい。

天照大神も綺麗だったけれど、直面の手力雄命（てぢからおのみこと）も美形だったのでは？

地謡の調子が独特で、でもとっても馴染みのあるリズムだ、何に似ているのだろうと思ったら、大徳寺でよく聞くお経だった。

大徳寺の月釜（お茶会）に朝一番で寄せていただくと、ご住職が利休さんの供養にお経を唱えている。どういうお経なのかは全然知らないけれども、門前の小僧習わぬ経を読む式に言う
と「ひえ～ひえ～」というところだけは妙にはっきり覚えていて、ここ黒川能の地謡の皆さんも同じお経を唱えているとしか思えない。録音だけを聞かされたら、わたしは迷わずお坊さんですねと言うだろう。非常に不思議な感じ。

この印象は「絵馬」だけではなく、この後ずっと変わらない。つまりわたしは一晩中ずっとお経を聞いていたわけなのだ。困った。



当屋でのお能は18時に始まり（我々は16時半から待機）、脇能「絵馬」と狂言「靱猿」が終わった時点で23時近く？ 下座から〈暁の使い〉がやってきました。〈下〉と大きく書いた提灯をぶら下げて登場し、舞台中央に坐って上座当屋さんと王祇守さんたちに挨拶をする。

ちなみにこの当屋さんと王祇守さんたちは演能中ずっとわたしの真後ろにいらっしゃった。当屋のおじいさんはずっと煙草をふかしてました。若い王祇守さんが鴨居に吊された王祇さまと神域をお守りしています。隅に翌日棚上がり尋常で走るようになる少年たちが坐っていて、彼らはお能に興味はないようでずっとマンガを読んでいます。王祇守さんはそれでも「仕方がないなあ」という感じで怒りはせず「明日は頑張れよ」と優しく励まします。中間管理職の辛いお立場かもしれませんがご立派でした(v_v)。

で、二番能が始まったのは日付も変わってから。わたしは、ほんとうにこのお能は朝までに終わるのだろうかと思いはじめましたとさ。

「頼政」



お囃子が独特だとメモに書いてある。でもどう独特だったのかは覚えていない。謡のほうはやっぱりお経チック。続いて狂言「附子」。

「羽衣」



白龍役がまた若い子で、羽衣をしっかり抱きしめて離したくない様子がリアル。

「返して」「やだびょん」「ふえーん」「げっ、泣くな」「でも一、しくしく」「わ、わかった。返すよ」「え、ほんと」「ああ」「天女、嬉しい」「でもその前に踊ってみせろよ」「羽衣が先よ」「それで逃げる気だな」「疑うなんて、悲しい。しくしく」……犬も喰わない痴話喧嘩みたいで、勝手にやってろよという気にもなってくる。若いっていいなあ。

黒川能が非常に長いのは、一音一音をしっかり発音するからのような気がする。特にワキ方に顕著で、たとえば「あら恥ずかしやさらばとて」と言うところを「ああらあはあずうかしいや

あさあらあばあとおてえ」と謡うので、慣れればなんとか聞き取れるようになるけれども、ほんとにまったくとんでもなく長いのである。

半裸の天女が雲を見上げて嘆く姿が印象的だった。

衣を返してもらったのがよほど嬉しかったのか、それからがまた延々長かった。こうなると、鑑賞しているというよりも、その場においてこの悠久の時間を共有するということのほうに意味がある気がしてくる。あくびをしていようが寝ていようがかまわないのだ。とにかくそこに立ち会って証人となること（何の？）がわたくしの役目なのよ、という感じで妙に燃えてきます。かなり独りよがりに。

個人的休憩のために外に出ている間に狂言「しびり」は終わってしまう。

わたしの連れは体力の限界に達して王祇会館へ一足先に帰り、元気なひとたちは下座へ「鐘巻」を見に移動していたりして、この頃になると上座のほうはだいぶすいてきて楽になった。かなりお腹もすいてきたところへ、稲庭うどんがふるまわれて思わず合掌。

「羅生門」



当屋は普通の古いお宅なので、ただでさえ鴨居が低いところに、志を包んだ方々のお名前を記した紙がところせましと貼られてひらひらしており、しかし演者は若い人が多くて、要するにみなさん背が高くて、なかなか顔を拝見するのが難しい。

写真撮影の許可はいただいたもののろくな写真がないのはそのせいもある。ああ、今だと思ってシャッターを押しても、デジカメも黒川入ってて、非常にのんびり焦点を合わせてもう誰もいなくなった頃カシャリと音がする。高感度フィルムを入れて普通のカメラを持参するのが正解と思う。

そんなこともあって、渡辺綱を髪を後ろからこっそり引っ張る鬼の姿を撮りたかったのに失敗。しかしそこはクリコさんが、ベストショットをものにしていたので分けてもらえた。ラッキー。

羅生門の配役を見ると、源頼光が子方になっている。でもその子は中学生くらいに見える。普通の舞台でならたしかに〈子方〉かもしれないけれども、でも、このひと以外もみんな子供だったんじゃないですか？ 頼光が子方なら、ワキツレの幼児はいったい何ですか。最初、頼光があんな

隅にいるわけないしなあとこんがらがってしまった。可愛かったです。もしかして君は金時？

この羅生門の間狂言は、今日一等笑いをとった役者ではないかと思う。

記憶が定かでないけれども、渡辺綱の下人ふたり組という役回りで、どうしてだったか片方が倒れて片方がそれを起こそうとする。しかし、倒れたほうは起きない。「おい、大丈夫か、起きろ」「早く起きろ」みたいなことを三度くらいまで言うのはお約束だったと思う。けれども、その後何度起こしても相方は起きない。これには周囲も失笑。

なぜといって時間も時間だし（朝の四時頃？）、いい加減みんな疲れているし、出番を待っているのはとても大変だったろうし、ひょっとしてお酒なんか入ってるかもしれないし、内心「ほんとに寝ちゃってるんじゃないの、あの子」という感じなのだ。囃子方とか地謡方とか、もしかすると起こしている役の子までも「えー、おまえほんとに寝てるわけー？」と不安そうにしている。

と、充分に場内の視線をひきつけたところで、がばっと起きました。絶妙です。素晴らしい。目が覚めました。

狂言「節分」では舞台の外へもお豆が撒かれて、わーい、お土産に持って帰ろう！ と、たくさん拾って帰った。みな小袋入りなので大丈夫。三角袋の甘納豆は自分で食べてしまって、福豆とでん六こんぶ大豆はお土産 v(^_^)

「金札」



いよいよ最後だ。シテが弓を持って舞うと、少し前に新しいものに取り替えて長くなっている蝋燭にぶつかりそうでスリルあり。

「節分」「金札」のあたりで、すでに現場は撤収モードに入っていて、床の間のお飾りを目録と照らし合わせたりしている。皆さん、引き際がよいというか、すぐに帰り道には人影がなくなってしまう、クリコさんと道に迷いそうになりつつ王祇会館へ帰りついた。

＊

まだお能のことをほとんど知らなかったとき、「五番能ってなあに？」と無邪気に尋ねたら、友人が「昔の興業は、神、男、女、狂、鬼を主題とした能を五番、間に狂言をはさんで演じるのが普通だった」と教えてくれて、「へえええ」と答えたきり後が続かなかった。わたしの想像力を超えていたのだと思う。演ずるのは勝手だけれど、まさかお客さんのほうがずっと見続けるわけではないよなあ、とそんな風に思ったような気がする。

その五番能を初体験してしまった。というのが、わたしにとっての〈王祇祭〉第一夜なのだと思う。そうか、こういうものなんですね。すごいです。意識朦朧としてるし。

帰って顔をぬぐったら、蠟燭の煤で真っ黒だった。



今回の黒川行きで月扇堂的に一番大きな事件は、生クリコさんを発見したことでしょう！

文章で饒舌な方は、案外実際は寡黙だったりするものだという予測どおりの、落ち着いた雰囲気
の誰にも優しい気配りをなさる方でした(v_v)

夜を徹してお能を見たあと、上座当屋から王祇会館へ帰る道をご一緒したことが忘れられません
。

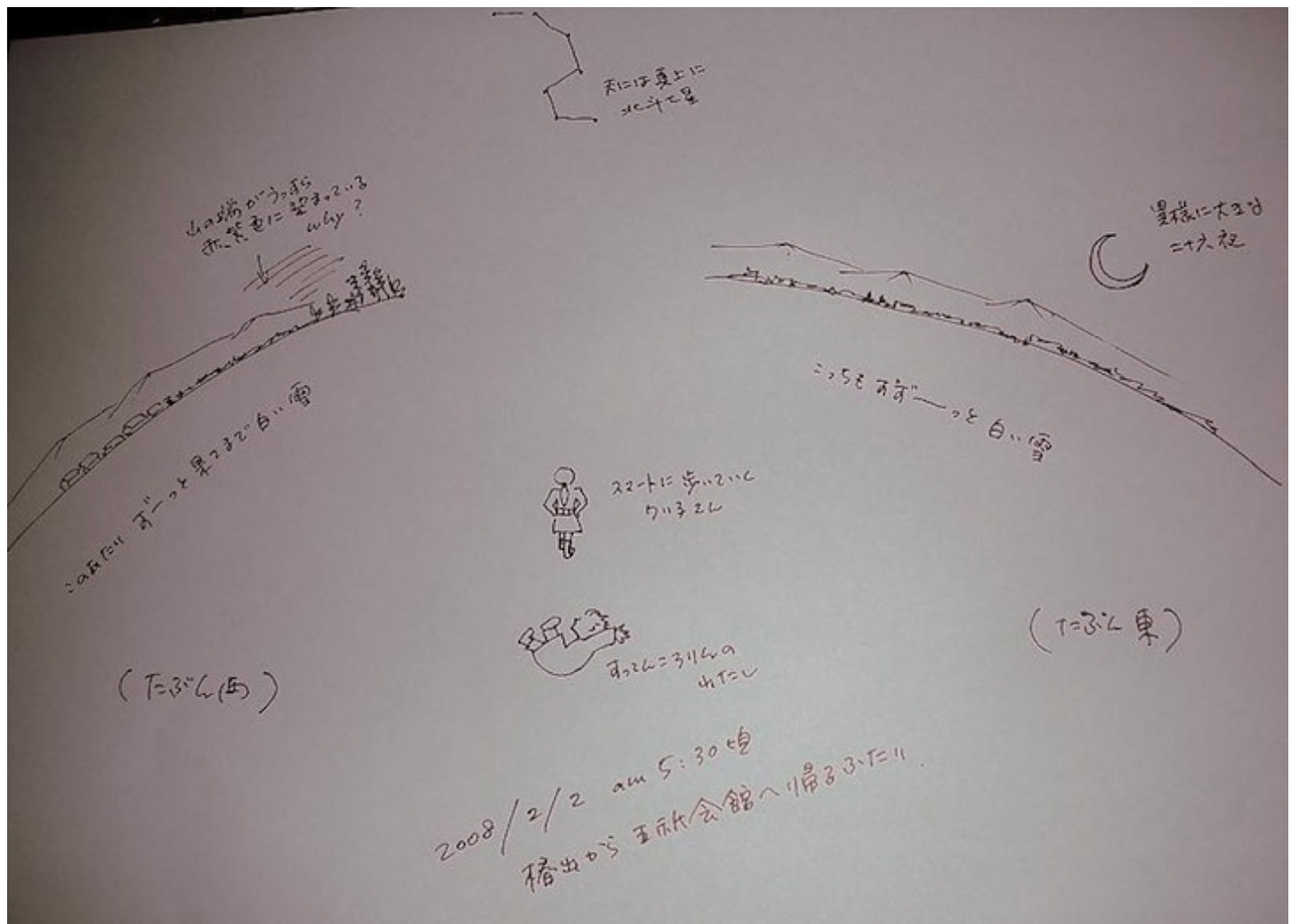
降ったり止んだり吹雪いたり刻一刻変化していた空模様が、夜明け前のその数十分だけは穏や
かに晴れて、空には星も瞬いていました。

右を見ても左を見ても山の麓まで続く田園がすべて雪に厚く覆われて一面の銀世界、その遥か向
こうに青白い山脈がどこまでも続いています。

山裾にはすっぽり雪で輪郭を丸くした家々が太郎も次郎も眠らせており、森や林は闇の中に深く
沈み込んでおり、かと思えば、なぜか西の空の一郭がうっすら赤紫に染まっており、振り返れば
特殊効果で大きくしたような月の船が浮かんでいたり、おとぎの国のような風景です。

そして、都会ではおよそあり得ない夜明け前のこんな風景の中を、歩いているのは見渡す限りわ
たしたち二人だけなのです。

ひとりだったら、もったいなさすぎます。分かち合えるひとがいてとても嬉しかった。こんな景
色をこそ写真に残したいけれど、まず無理なので、忘れないように描いておきました↓。



雪国の生活は厳しいこともたくさんあるでしょうが、こんなに素晴らしい自然の中で暮らしていけるなら、それはそれで神様からの贈り物ですよね。

王祇様、万歳！

2008.2.2 王祇祭（春日神社能舞台）

黒川能・王祇祭（山形・春日神社）



明け方、王祇会館へ戻り1時間ほど休む。7時頃にはもう〈朝尋常〉という祭事があるということで春日神社へ行ってみる。上座と下座の若者がそれぞれの王祇様を担いで階段を駆け上り、神社の窓から中へ突っ込むという行事で、先着を競う。

神社の前でだいぶ待っていたのだけれども、なかなか始まる気配がない。身体も冷えてくるし、朝食の時間もなくなるし、お能にも備えたいしということで、わたしは見物を断念していったん帰る。

後から聞いた話を総合すると、〈朝尋常〉の前には、上座から下座へ〈七度半の使い〉が出され、両座揃って神社へ上ってくることになっているのだけれども、今日下座の大地踏をする予定だった子の具合が悪くなり、急遽、昨日当屋で務めた子が再び演じるようになって、その急な主役交替によって宮のぼりのあたりからすでに一時間以上の遅れが出ていた模様。

そうしてようやく始まった〈朝尋常〉は上座の勝利だったそう。代表で走ったのは、昨夜、蠟燭番を務めていた青年。上座の当屋さんも喜んでいらしたとか。

肝心のお能は、わたしの記憶では時間通りに始まった。昨晚上座、下座で舞われた脇能を再度上演し、両座で式三番を演じて締める。

つまり、絵馬/高砂/大地踏/式三番。

「絵馬」



昨夜上座で拝見しているので、お休みタイムにしてしまった。徹夜しているので、かなり眠い。
そして、この「絵馬」は非常に長い。

「高砂」



これは、下座なので、昨日見られなかったから一生懸命見る。

春日神社の能舞台には、左右に橋がかりがあり、上座の囃子方は向かって左から出てくるけれども、下座のほうは右から出てくる。そして並び方も左から笛、小鼓、大鼓...の順番。話には聞いていたけれども、実際に見るとやっぱり不思議で面白い。

前場、お爺さんは熊手を、お婆さんは箒を持って出てくる。上品そうなお婆さんだけど、箒を肩に担いでいる。。。なんとなく違和感。。。。

「大地踏」



両座立ち合いとなるので、両方の橋がかりから両座の囃子方が楽器を掲げた独特の姿勢でぞろぞろと現れる。圧巻。

やがて稚児の登場。上座の稚児は男装、下座の稚児は女装している（中味はどちらも男の子）。上座のほうは縦に抱かれて、下座のほうはお姫様抱っこでの登場。

それぞれに自分の座の王祇様を広げてその前で舞う。

「式三番」



翁は上座から、三番叟は下座から。三番叟のくるりと扇を回しながら回転するあたりが、とてもカッコよかった。



三番叟が舞っている後ろで、若衆が輪になって「わーーーーーっ」と飛び跳ねて騒いでいる。どうやらこの後に行われる棚上り尋常に向けて景気づけをしているらしい。下座がそんなことをすると上座も負けずに「わーーーーーっ」「ドンドンドンドンッ」と暴れる。そんなことは気にせず三番叟も自分の激しい舞を続けている。いやがおうにも祭のクライマックスに向けて気分は盛り上がり、見ているこちらにもワクワクしてくる。

〈棚上り尋常〉



昨日わたしの真後ろで、お能など我関せずという感じでマンガを読んでいたふたりが上座の代表。中学生とのことだった。彼らは祭壇の前に置かれた朱塗りの盃から、「せーの」でお酒を飲み干し走り出す。そして能舞台の上にある棚に飛び上がり、そこへ王祇様を乗せる。



が、上座はちょっと作戦不足だったと思う。二人組なのだけど、先頭の子がそもそもお酒を飲むのが非常に辛そうで、満足なスタートをきれなかった。従って、大差で下座の勝ち。

彼らはこの後、棚の上に座り続けて両座ずっと睨み合う格好。その間に下ではさまざまな盃事など一時間以上〈間〉があって、最後の〈王祇おろし〉〈餅切り〉〈布剥ぎ〉へと突入していく。

最後の最後まで付き合うつもりでじっと待っていたにもかかわらず、いざ始まってみたらあっという間にすべてが終わってしまっていた。

ここでも上座の男の子たちは作戦不足が祟り、大差で下座の勝ち(/_;)

何が起こったのかわからない間に終わっていたけれども、とにかく、王祇様に巻き付けてあった布を剥がして、来年の王祇守の首にぐるぐる巻いて王祇さまを内陣へ運び込んだようだ。



＊

これで王祇祭は終了。紙で作った魔除けのお花を一輪ずついただいて帰りました。１６時頃終了の予定が、１８時回ってました。

王祇祭を体験しての率直な感想は、「よくやるなあ (@o@;)」。

お能のために民家を改造するとか、すさまじい量のお豆腐をみんなで焼くとか、五番能をあっちでもこっちでも演じるためにそれぞれが練習をするとか、ものすごいエネルギーがいる。これを継続してきたということは、奇跡に思える。

そして、このお祭りのプログラムのよくできていること。それぞれの深い意味は知らないけれども、エンターテインメントとして見てもとてもよくできている。構成が美しい。

最後に、このお祭りに参加できる人々は幸せだということ。

幼児には幼児の、中学生には中学生の、青年には青年の、そして長老には長老の、それぞれの役割があり、皆がきちんと期待されている。都会の過保護な子供みたいにスポイルされていない。そういうひとつひとつの体験が、人生にとってどれほど得難い貴重なものであるか、彼らは知っているだろうか。誰もが、こんなふうに期待してもらえないわけじゃないということ。

ちょいワルふうな髪型をしたお兄さんが、案外優しい性格で、明らかに負けているにも関わらず

、笑って「わーーーーっ」と座を盛り上げているところなんか、涙が出るほど素敵でした。

黒川能〈王祇祭〉2008

<http://p.booklog.jp/book/44237>

著者：月扇堂

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/eikoasahina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44237>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44237>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.